

あと六夜寝ると二〇〇〇年。

「新ミレニアム(千年紀)」の祝賀ムードが世界中で高まっている。キリストが生まれた(とされる)年に始まる二〇〇〇年をカトリック教会が「大聖年」で祝うのは分かるが、仏教徒やイスラム教徒まで一緒に祝うのは、思えば変な話だ。

イスラム(ヒジュラ)暦では一四二〇年という中途半端な年だし、日本は六十年ほど前「紀元(皇紀)二六〇〇年」を国を挙げて祝ったはずではなかったか。とは言え、皇紀はもはや一般には使われなし、イスラム圏でも新聞の日付など西暦とヒジュラ暦で併記する。西暦がいわゆる「グローバル・スタンダード」(世界標準)になった証(あかし)がミレニアム騒ぎなのだろう。なぜ、そつなつたの

か。以下は、一つの仮説である。

一九九二年の夏、スペイン南部・セビリアは焼けつくように暑かった。ともにセビリア大学教授のフアン・ヒル、コンスエロ・パレラ夫妻を自宅に訪ねたのは、コロンブスのアメリカ到

中外時評



達五百周年に、世界的に知られたコロンブス研究者の二人へのインタビューが目的だった。

興味深い話の合間に、セビリアに現存するコロンブスの蔵書の「東方見聞録」の精巧な複製を見せてもらった。装丁から余

白のコロンブス自身の書き込み

まで忠実に再現していた。黄金の国「ジパング」を紹介したマルコ・ポーロの旅行記を、むさばるように読んだコロンブスの姿が目につかぶようだった。聞けば、セビリアに残る彼の

たそれらの本から情報と情熱を

得て「コロンブスは一四九二年、大西洋を西に向かった。世界史に画期を成す事件だった。それまで相手の存在すら知らなかった複数の文明が、互いに影響を及ぼし合う文字通りの

暦が世界標準になることもなかったかもしれない、と考えるのは、飛躍だろうか。

コロンブスに先立つ五百年ほど前、レフ・エリクソン率いるヴァイキングの団が米大陸に到達していたことは今や定説で

なぜ「西暦」を祝うのか？

知のビッグバンの重い意味

書き込みがある蔵書は、ほかにピエル・タイイの「世界の姿」やピウス二世の「世界誌」などがあり、いずれも印刷本だ。グーテンベルクが活版印刷術を美用化したのが一四五五年ごろ、それから二、三十年のうちに

「世界史」がここから始まる。イスラム勢力に押されがちな西歐文明が、世界に伸長する大きな転機にもなった。

グーテンベルクの印刷革命がなかったら、コロンブスの航海もなかったかもしれない、西

ある。だが、その「ヴァインランド」(と彼らは名付けた)はヴァイキングの年代記風物語「サガ」に記録されたものの、印刷術以前だったので広く共有される情報にはならなかった。コロンブスの航海は、すぐに

全欧ルック州で物が院のやっつそれい生産土改革れず、史の歩ない。西歐特徴のも、する印刷り、へ先にアル

もなか
えるの
百年は
定説で
大陸に

ンラン
(は)ヴ
語「サ
印刷
自され
すべに

●●論説副主幹 土谷 英夫●●

全欧州に伝わった。グーテンベルクから五十年ほどの間に、欧州で二、三万種類数巨万冊の書物が印刷されたとされる。修道院の写字生一人が一年がかりでやっと一冊の写本を完成させたそれ以前に比べ、欧州の情報生産性は飛躍的に向上し、そのコストは格段に下がった。

十六世紀のルターによる宗教改革も、印刷術抜きには考えられず、欧州のメディア革命が歴史の歩みを早めたことは間違いない。現ミレニアムの後半が、西欧文明の地球規模の拡大として特徴づけられるようになったのも、さかのばればそこに帰着するのではないだろうか。

印刷術自体は中国の発明であり、金属活字も東アジアが西欧に先駆けた。これも仮説だが、アルファベットに比べ字種が万

を数える「漢字」や、出版の自由への制約が、東アジアの情報ビッグバンを、不発に終わらせたのではないだろうか。

他方、西欧は活版印刷術の登場が、ルネサンスの時代に重なり、知の流通・蓄積にフル活用されて情報ビッグバンに点火し欧州の知のパワーを一挙に高めたのではなからうか。西欧文明の優位は単に「大砲と帆船」だけではなかった。

どうやらミレニアムの間にいる私たちは、五百年ほど前の欧州のそれに匹敵する情報革命に遭遇しつつある。インターネットや携帯電話がもたらす情報ビッグバンは、やがてコロンブスの航海や宗教改革クラスの世界的な大変動を誘発するだろう。それを怖いと思うか、面白いと思うかは、各人の自由だが。